

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 －2020年（令和2年）－

古澤優 三浦美穂¹⁾ 吉野修司¹⁾ 杉本貴之¹⁾ 藤崎淳一郎

Summary of the 2020 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Furusawa Yu, Miura Miho,
Yoshino Shuji, Sugimoto Takayuki, Fujisaki Junichiro

要旨

2020年に県内では全数把握対象90疾患中、25疾患が報告された。疾患別では新型コロナウイルス感染症（876例）、結核（152例）、つつが虫病（57例）、梅毒（40例）の報告が多かった。梅毒は2019年に過去最も多い報告数（23例）となったが、それを大幅に上回る報告数となった。また、県内初となる薬剤耐性アシネトバクター感染症が1例報告された。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年の約半数、例年の約0.4倍、全国の約2.0倍であった。眼科定点対象疾患の報告総数は、前年及び例年の約0.2倍、全国の約1.9倍であった。基幹定点対象疾患の報告総数は、前年の約0.4倍、例年の約0.1倍、全国の約0.2倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年及び例年の約1.2倍、全国の約0.7倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年と同程度、例年の約0.9倍、全国の約0.8倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994年（平成6年）から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における2020年（令和2年）の患者発生状況をまとめたので報告する。

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた115疾患を調査対象とした。

指定届出医療機関（以下「定点」という。）は、感染症発生動向調査事業実施要綱¹⁾に基づき選定した（表1）。

表1 保健所別指定届出医療機関（定点数）

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59	36	6	7	13

企画管理課 ¹⁾ 微生物部

2 調査期間

全数把握対象疾患，定点把握対象疾患については2020年1週から53週まで，インフルエンザについては2020/2021年シーズンの2020年41週から2021年14週までをそれぞれ調査期間とし，診断日をもとに集計した．なお，新型コロナウイルス感染症については陽性判明日をもとに集計した．

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった．

2) 二類感染症

結核152例が報告された．

a) 結核 Tuberculosis

報告数は152例で，前年(194例)の約0.8倍であった．病型は，肺結核が83例，その他の結核(結核性胸膜炎，結核性脊椎炎，粟粒結核，結核性リンパ節炎)が8例，肺結核及びその他の結核(粟粒結核，気管支結核，胸膜炎，頸部リンパ節)が5例，疑似症患者が3例並びに無症状病原体保有者が53例であった．宮崎市(92例)，日向(15例)，都城，延岡(14例)保健所からの報告が多く，性別では男性が77例，女性が75例であった．年齢別では70歳以上が88例と全体の約6割を占めた．

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症23例が報告された．

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は23例で，前年(42例)の約0.5倍であった．患者が14例，無症状病原体保有者が9例であった．O血清型別では，O26が10例，O157が5例，O115が3例，O103が2例，O91，O121及びO124が各1例であった(表2)．宮崎市(8例)，都城，高鍋(各5例)，延岡，日南，小林，日向及び中央(各1例)保健所からの報告であった．年齢別では10歳代が6例と多く，発生月別

では，7月が全体の約3割を占めた．

表2 O血清型別報告数

O血清型	報告数
O26	10
O157	5
O115	3
O103	2
O91	1
O121	1
O124	1

4) 四類感染症

E型肝炎3例，A型肝炎7例，重症熱性血小板減少症候群(SFTS)5例，つつが虫病57例，日本紅斑熱13例，レジオネラ症9例及びレプトスピラ症1例が報告された．

a) E型肝炎 Hepatitis E

報告数は3例で，宮崎市(2例)及び日向(1例)保健所からの報告であった．年齢別では50歳代が1例，70歳代が2例で，主な症状として，発熱，食欲不振，黄疸，肝機能異常，肝腫大，嘔気がみられた．

b) A型肝炎 Hepatitis A

報告数は7例で，宮崎市(4例)，都城(2例)，日向(1例)保健所からの報告であった．年齢別では0～4歳，10歳代，20歳代，30歳代，60歳代が各1例で，70歳代が2例であった．主な症状として全身倦怠感，発熱，食欲不振，黄疸，肝腫大，肝機能異常等がみられた．遺伝子型は5例がIA型で2例が不明であった．推定感染経路は経口感染が6例，輸血・血液製剤及び不明が各1例であった．

c) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS (Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome)

報告数は5例で，宮崎市(3例)，延岡(2例)保健所からの報告であった．性別は男性が3例，女性が2例で，年齢は60歳代が1例，70歳代及び80歳代が各2例であった．主な症状として発熱，神経症状，下痢，食欲不振，全身倦怠感，白血球・血小板減少等がみられた．患者の発症時期は，3～11月で特に5月に多かった．

d) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は 57 例で前年 (43 例) の約 1.3 倍と増加した。患者発生時期は例年どおり冬季で、1 月 (6 例)、11 月 (18 例)、12 月 (33 例) の報告であった。都城 (17 例)、小林 (13 例)、高鍋 (9 例)、日南 (8 例) 保健所からの報告が多く、性別は男性が 34 例、女性が 23 例、年齢別では 60 歳以上が約 8 割を占めた。主な症状として頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹等がみられた。

e) 日本紅斑熱 **Japanese spotted fever**

報告数は 13 例で、患者の発生時期は 5 月から 10 月であった。日南 (5 例)、宮崎市 (4 例)、小林 (2 例)、都城、中央 (各 1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 4 例、女性が 9 例、年齢別では 70 歳代及び 80 歳代が各 5 例と多く、次いで 60 歳代が 2 例、50 歳代が 1 例であった。主な症状として発熱、頭痛、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常等がみられた。

f) レジオネラ症 **Legionellosis**

報告数は 9 例で、宮崎市、都城、小林、日向 (各 2 例)、延岡 (1 例) 保健所からの報告であった。病型はいずれも肺炎型で、性別は男性が 8 例、女性が 1 例であった。年齢別では 60 歳代と 70 歳代が各 3 例、50 歳代、80 歳代及び 90 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱、咳嗽、呼吸困難、下痢、意識障害、肺炎等がみられた。

g) レプトスピラ症 **Leptospirosis**

報告数は 1 例で、日向保健所からの報告であった。患者は 60 歳代の男性で、主な症状として発熱、結膜充血、蛋白尿、腎不全等がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢 8 例、ウイルス性肝炎 6 例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 3 例、急性脳炎 4 例、クロイツフェルト・ヤコブ病 3 例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 6 例、後天性免疫不全症候群 5 例、侵襲性インフルエンザ菌感染症 2 例、侵襲性肺炎球菌感染症 10 例、水痘 (入院例) 9 例、梅毒 40 例、播種性クリプトコックス症 2 例、破傷風 5 例、百日咳 37 例及び薬剤耐性アシネトバクター感染症が 1 例報告された。

a) アメーバ赤痢 **Amebic dysentery**

報告数は 8 例で、病型はいずれも腸管アメーバ症で、宮崎市 (6 例)、都城及び延岡 (各 1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 7 例、女性が 1 例で、年齢別では 40 歳代、50 歳代及び 60 歳代が各 2 例、70 歳代及び 80 歳代が各 1 例であった。主な症状として下痢、粘血便、しぶり腹、腹痛、大腸粘膜異常所見等がみられた。

b) ウイルス性肝炎 **Viral hepatitis**

報告数は 6 例で、宮崎市 (5 例)、都城 (1 例) 保健所からの報告であった。原因病原体はいずれも B 型肝炎ウイルスで、性別はいずれも男性で、年齢別では 20 歳代、30 歳代及び 40 歳代が各 2 例であった。主な症状として全身倦怠感、発熱、嘔吐、褐色尿、肝機能異常、黄疸等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

Carbapenem-Resistant *Enterobacteriaceae*

報告数は 3 例であった。原因病原体は *Klebsiella(Enterobacter) aerogenes*, *Enterobacter aerogenes*, *Klebsiella pneumoniae* が各 1 例で、いずれも宮崎市保健所からの報告であった。年齢別では 20 歳代が 1 例、60 歳代が 2 例で、主な症状は尿路感染症、敗血症がみられた。

d) 急性脳炎 **Acute encephalitis**

報告数は 4 例で、原因病原体は単純ヘルペスウイルス、ヒトヘルペスウイルス 6 が各 1 例、病原体不明が 2 例であった。都城 (2 例)、延岡及び日向 (各 1 例) 保健所からの報告で、年齢別では 0~4 歳が 2 例、40 歳代と 60 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱、頭痛、痙攣、意識障害、髄液細胞数の増加がみられた。

e) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は 3 例で、都城 (2 例)、宮崎市 (1 例) 保健所からの報告であった。病型は古典型クロイツフェルト・ヤコブ病が 2 例、ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病が 1 例であった。性別は男性 2 例、女性 1 例で、年齢は 60 歳代が 1 例、70 歳代が 2 例であった。主な症状として進行性認知症、ミオクローヌス、錐体路症状、錐体外路症状、小脳症状、視覚異常、記憶障害、精神・知能障害、筋強剛がみられた。

f) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infections

報告数は6例で、血清群はB群が4例、C群、G群及び不明が各1例であった(同一人から2群検出)。宮崎市、延岡(各3例)保健所からの報告であった。年齢別では0~4歳、60歳代、80歳代が各1例、70歳代が3例であった。主な症状としてショック、肝不全、腎不全、DIC、軟部組織炎、中枢神経症状等がみられた。

g) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は5例であった。病型はAIDSが3例(指標疾患:ニューモシスティス肺炎が2例、サイトメガロウイルス感染症及びHIV脳症が各1例)、無症候性キャリアが2例であった。宮崎市(3例)、都城(2例)保健所からの報告で、性別はいずれも男性であった。年齢別では20歳代及び30歳代が各2例で、40歳代が1例であった。感染経路は異性間性的接触1例、同性間性的接触4例、不明1例であった。

h) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive *Haemophilus influenzae* infection

報告数は2例で、宮崎市保健所からの報告であった。患者は0~4歳と90歳代で、主な症状として頭痛、発熱、菌血症等がみられた。

i) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal infection

報告数は10例で、宮崎市、都城(各4例)、延岡、日向(各1例)保健所からの報告であった。性別は男性が8例、女性が2例で、年齢はいずれも60歳代以上であった。主な症状として発熱、咳、全身倦怠感、意識障害、肺炎、髄膜炎、菌血症等がみられた。ワクチン接種歴は接種無し、不明が各4例、有りが2例であった。

j) 水痘(入院例) **Chickenpox**

報告数は9例で、宮崎市(5例)、都城(3例)、延岡(1例)保健所からの報告であった。病型は検査診断例が3例、臨床診断例が6例であった。年齢別では0~4歳、20歳代及び80歳代が各2例で、30歳代、40歳代及び60歳代が各1例ずつであった。主な症状として発熱、発疹、熱性痙攣、免疫不全がみられ、2例が他疾患入院中の発症で

あった。ワクチン接種歴は不明が6例、無しが2例、有りが1例であった。

k) 梅毒 **Syphilis**

報告数は40例で、過去最多となった昨年(23例)を大きく上回る報告数となった。病型は早期顕症I期が14例、早期顕症II期が16例、無症状病原体保有者が10例であった。宮崎市(25例)、都城(5例)、小林、日向(各4例)、延岡(2例)保健所からの報告であった。性別は男性が31例、女性が9例で、年齢別では20歳代が14例、30歳代が16例、40歳代が5例、10歳代、50歳代、60歳代、70歳代が各1例であった。感染経路は異性間性的接触が25例、同性間性的接触が4例、性的接触(異性間・同性間不明)が3例、不明が8例であった。主な症状として初期硬結、硬性下疳、鼠径部リンパ節腫脹、梅毒性バラ疹、丘疹性梅毒疹、眼症状等がみられた。

1) 播種性クリプトコックス症

Disseminated cryptococcosis disease

報告数は2例で、宮崎市、都城保健所からの報告であった。年齢は30歳代及び60歳代で、主な症状として頭痛、項部硬直、中枢神経系病変、胸部異常陰影がみられた。

m) 破傷風 **Tetanus**

報告数は5例で、宮崎市(4例)、高鍋(1例)保健所からの報告であった。年齢別では70歳代が3例、30歳代、80歳代が各1例であった。主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、嚥下障害、発語障害、強直性痙攣、呼吸困難(痙攣性)、痙笑等がみられた。

n) 百日咳 **Pertussis**

報告数は37例と昨年(304例)を大きく下回った。中央(17例)、延岡、高鍋(各7例)、日向(3例)、宮崎市(2例)、高千穂(1例)保健所からの報告で、性別は男性が15例、女性が22例であった。年齢別では8~13歳が約6割を占めた。ワクチンの接種歴は有りが29例、無しが2例、不明が6例であった。主な症状として持続する咳、夜間の咳き込み、呼吸苦、ウープ等がみられた。

o) 薬剤耐性アシネトバクター感染症

Multidrug-resistant *Acinetobacter* sp infection

報告数は1例で、都城保健所からの報告であった。年齢は60歳代で、主な症状として肺炎がみられた。

p) 新型コロナウイルス感染症

Corona-Virus Disease-2019

報告数は876例で、宮崎市(422例)、都城(164例)、高鍋(105例)保健所からの報告が多かった。年齢別では40歳代が全体の約2割を占めた。また、週ごとの感染者数は図1のとおりであった。

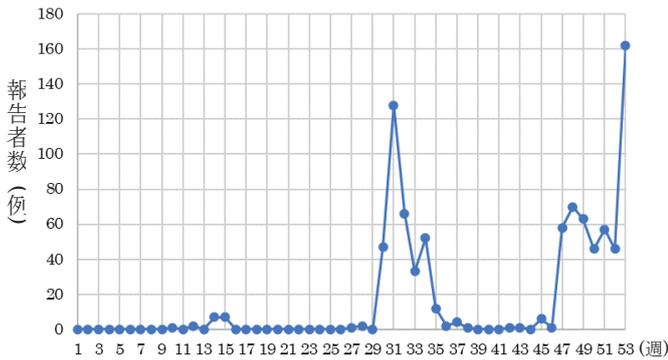


図1 新型コロナウイルス感染症 週ごとの感染者数推移

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は19,121人、定点当たりの報告数は531.1、前年の約半数、過去5年間の平均値(以下、「例年」という。)の約0.4倍、全国の約2.0倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表3、経時的発生状況は図2のとおりで、その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2020/2021年シーズンの報告総数は4人、定点当たりの報告数は0.07で、全国の約0.3倍で、過去最低の値となった。年齢は0~4歳、10歳代、20歳代、60歳代であった。

b) RSウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は289人、定点当たりの報告数は8.0で、前年及び例年の約0.1倍、全国の約1.4倍であった。都城(28.7)、日向(6.8)、宮崎市(5.2)保健所からの報告が多く、6ヵ月~2歳が全体の77%を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は948人、定点当たりの報告数は26.3で、前年及び例年の約0.6倍、全国の約2.4倍であった。宮崎市(41.9)、都城(34.7)、延岡、高鍋(22.0)保健所からの報告が多く、6ヵ月から3歳が全体の82%を占めた。

d) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は4,534人、定点当たりの報告数は125.9で、前年の約0.9倍、例年の約1.1倍、全国の約2.0倍であった。日南(291.3)、宮崎市(180.4)、延岡(177.0)保健所からの報告が多く、3歳から6歳が全体の46%を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は9,304人、定点当たりの報告数は258.4で、前年の約0.7倍、例年の約0.6倍、全国の約1.9倍であった。小林(413.3)、中央(376.0)、日向(345.3)保健所からの報告が多く、1歳から2歳が全体の31%を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は503人、定点当たりの報告数は14.0で、前年の約0.7倍、例年の約0.6倍、全国の約1.4倍であった。中央(30.0)、日南(19.7)、都城(18.2)保健所からの報告が多く、4歳から6歳が全体の41%を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は736人、定点当たりの報告数は20.4で、前年及び例年の約0.2倍、全国の約3.5倍であった。日南(49.7)、都城(43.5)、中央(29.0)保健所からの報告が多く、1歳から3歳が全体の81%を占めた。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は451人、定点当たりの報告数は12.5で、前年の約0.3倍、例年の約0.6倍、全国の約2.2倍であった。日向(17.0)、都城(16.7)、宮崎市(16.5)保健所からの報告が多く、4歳から6歳が全体の54%を占めた。

i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は1,406人、定点当たりの報告数は39.1で、前年の約1.1倍、例年の約0.9倍、全国の約1.9倍であった。延岡(54.5)、宮崎市(47.2)、中央(44.0)保健所からの報告が多く、6ヵ月か

ら1歳が全体の91%を占めた。

j) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は807人、定点当たりの報告数は22.4で、前年及び例年の約0.4倍、全国の2.8倍であった。中央(46.0)、都城、延岡(35.8)保健所からの報告が多く、1歳から2歳が全体の73%を占めた。

k) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は139人、定点当たりの報告数は3.9で、前年の約0.8倍、例年の約0.1倍、全国の約1.5倍であった。中央(13.0)、延岡(8.3)、都城、日南(4.7)保健所からの報告が多く、3歳から6歳が全体の55%を占めた。

2) 眼科及び基幹定点対象疾患

眼科定点対象疾患の報告総数は149人、定点当たりの報告数は24.8で、前年及び例年の約0.2倍、全国の約1.9倍であった。

基幹定点対象疾患の報告総数は15人、定点当たりの報告数は2.1で、前年の約0.4倍、例年の約0.1倍、全国の約0.2倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告はなかった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は149人、定点当たりの報告数は24.8で、前年及び例年の約0.2倍、全国の1.9倍であった。年齢別では20歳未満が全体の23%を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告総数は4人、定点当たりの報告数は0.57で、前年は報告がなく、例年の約2.9倍、全国の約0.7倍であった。年齢はいずれも0~4歳で、原因菌は1例がStreptococcus Agalactiae、3例が不明であった。

d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は1人、定点当たりの報告数は0.14で、前年と同じ、例年の約0.1倍、全国の約0.2倍であった。年齢は0~4歳で、原因菌は不明であった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasmal pneumonia

報告総数は7人、定点当たりの報告数は1.0で、前年の約0.5倍、例年及び全国の約0.1倍であった。5~9歳が5例、0~4歳、40歳代が各1例であった。

f) クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告はなかった。

g) 感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告総数は3人、定点当たりの報告数は0.43で、前年の約0.1倍、例年の約0.04倍、全国の約0.8倍であった。宮崎市(2.0)、日向(1.0)保健所からの報告で、10歳未満が全体の67%を占めた。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は461人、定点当たりの報告数は35.5で、前年及び例年の約1.2倍、全国の約0.7倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は192人、定点当たりの報告数は27.4で、前年と同程度、例年の約0.9倍、全国の約0.8倍であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は259人、定点当たりの報告数は19.9で、前年の約1.1倍、例年と同程度、全国の約0.7倍であった。延岡(38.5)、都城(29.5)、日向(21.0)保健所からの報告が多かった。性別は男性が約4割、女性が約6割で、年齢別では20歳代が全体の52%を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

報告総数は106人、定点当たりの報告数は8.2で、前年及び例年の約2.1倍、全国の約0.9倍であった。日南(47.0)、宮崎市(10.8)保健所からの報告が多かった。性別は男性が約3割、女性が約7割で、年齢別では30歳代から40歳代が全体の40%を占めた。

c) 尖圭コンジローマ *Condyloma acuminatum*

報告総数は 22 人，定点当たりの報告数は 1.7 で，前年の約 1.5 倍，例年と同程度，全国の約 0.3 倍であった。宮崎市 (4.8)，日南，高鍋 (1.0) 保健所からの報告であった。性別は男性が約 2 割，女性が約 8 割で，20 歳代が全体の 64% を占めた。

d) 淋菌感染症 *Gonorrhoea*

報告総数は 74 人，定点当たりの報告数は 5.7 で，前年及び例年の約 1.1 倍，全国の約 0.7 倍であった。延岡 (12.5)，都城 (10.0)，高鍋 (5.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 7 割，女性が約 3 割で，20 歳代から 30 歳代が全体の 73% を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant Staphylococcus aureus infection

報告総数は 190 人，定点当たりの報告数は 27.1 で，前年と同程度，例年及び全国の約 0.9 倍であった。70 歳以上が全体の 65% を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant Streptococcus pneumoniae infection

報告総数は 2 人，定点当たりの報告数は 0.29 で，前年の 2.0 倍，例年の約 0.3 倍，全国の約 0.2 倍であった。年齢は 0~4 歳であった。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant Pseudomonas aeruginosa infection

報告はなかった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち，結核は 2019 年と比較し減少した。2014 年以降やや減少傾向であったが，2019 年は増加傾向となった。0 歳から 100 歳代まで幅広い年齢層で報告され，病型で比較すると，肺結核が全体の約 6 割を占めた。年齢では 70 歳代以上が全体の約 6 割を占めた。また，梅毒は昨年を大きく上回る報告数となっており，過去最多となった。全国的にも年々増加傾向であり，県内での報告数も急激に増えているため，今後も動

向に注意する必要がある。また，県内初となる薬剤耐性アシネトバクター感染症の患者も報告された。

定点対象疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は，前年の約 0.5 倍，例年の約 0.4 倍，全国の約 2.0 倍であった。特にインフルエンザについては報告人数が 4 人と過去最低の報告数となった。また，小児科対象疾患のうちほとんどの疾患が例年より少ない報告数であった。

眼科定点対象疾患のうち，そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は，前年及び例年の約 0.2 倍と減少したが，全国の約 1.9 倍と多く，例年通りの傾向であった。

基幹定点対象疾患の報告数は前年の約 0.4 倍，例年の 0.1 倍，全国の約 0.2 倍であった。また，対象疾患の中で，年々増加傾向で，昨年減少がみられた感染性胃腸炎 (ロタウイルス) について本年も引き続き減少傾向となった。

月報告対象疾患の性感染症の報告数は前年及び例年の約 1.2 倍，全国の約 0.7 倍であった。性器ヘルペスウイルス感染症は 30~40 歳代に多く認められ，それ以外の疾患は 20 歳代に多く認められた。また薬剤耐性菌感染症は前年とほぼ同程度，例年の約 0.9 倍，全国の約 0.8 倍であった。

本調査結果から，疾患によって流行発生時期や地域差，年齢差等があることが分かった。また，新たな疾患である新型コロナウイルス感染症の流行，その影響かは不鮮明だがインフルエンザの激減，小児科疾患の減少など新たな動向を見せた 1 年でもあった。今後も引き続き，感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い，感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに，幅広い世代に適切な情報の提供と感染予防の啓発を行っていく必要があると考えられる。

備考)

感染症発生動向調査事業は，患者情報と病原体情報から構成されており，当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

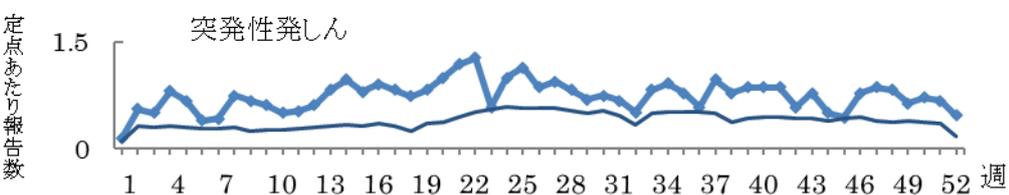
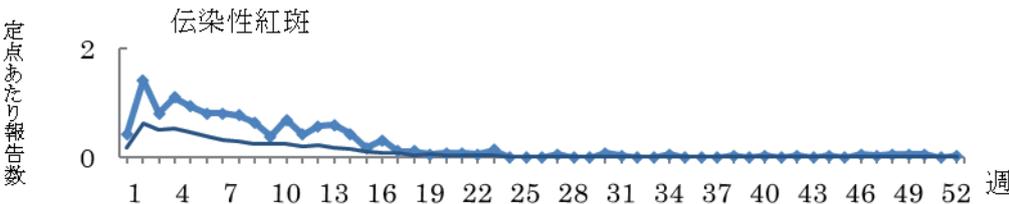
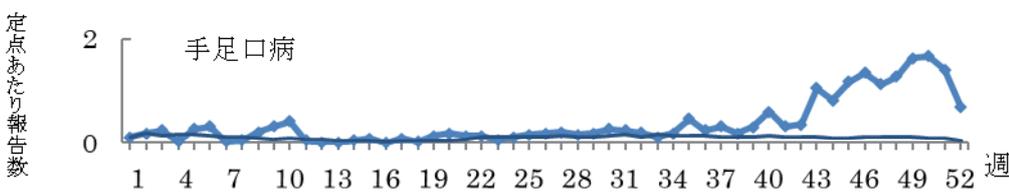
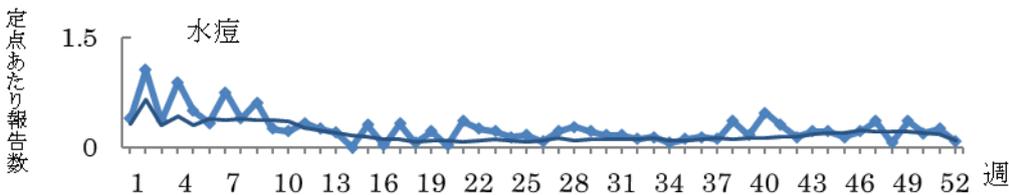
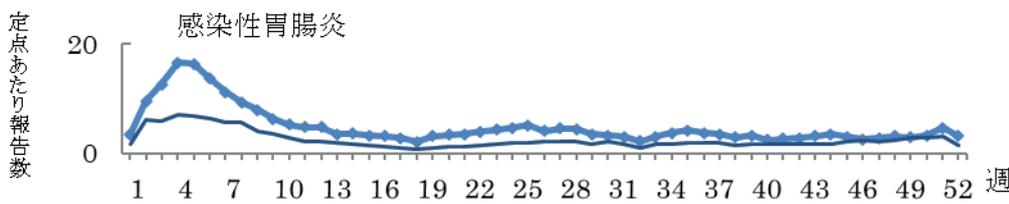
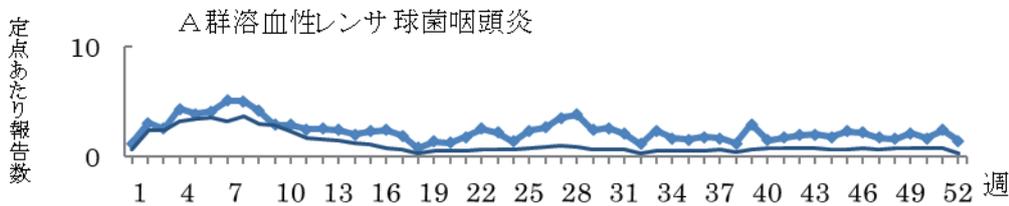
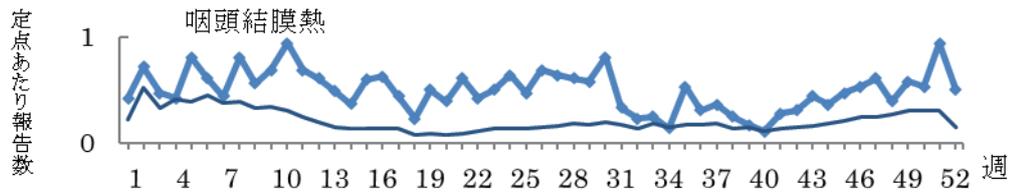
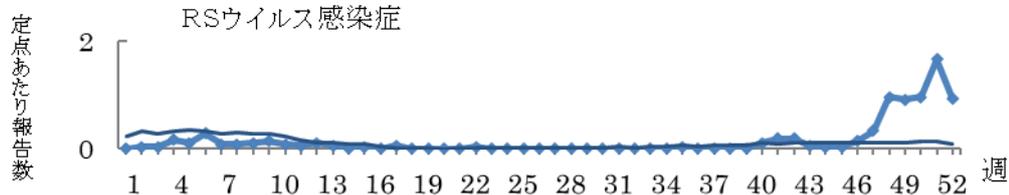
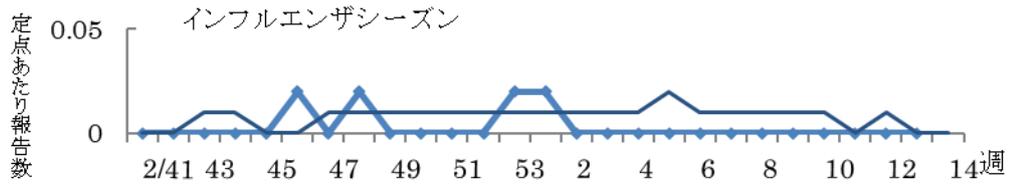
文献

- 1) 厚生省保健医療局長通知. 感染症の予防及び

感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について. 平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号.

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2020年）

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2019年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2020年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザシーズン	4	0.1	—	—	0	0	32
RSウイルス感染症	289	8.0	6ヵ月～2歳	77	10	11	140
咽頭結膜熱	948	26.3	6ヵ月～3歳	82	57	64	236
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	4,534	125.9	3歳～6歳	46	91	109	198
感染性胃腸炎	9,304	258.4	1歳～2歳	31	72	55	194
水痘	503	14.0	4歳～6歳	41	72	55	139
手足口病	736	20.4	1歳～3歳	81	18	16	351
伝染性紅斑	451	12.5	4歳～6歳	54	32	55	216
突発性発しん	1,406	39.1	6ヶ月～1歳	91	105	88	188
ヘルパンギーナ	807	22.4	1歳～2歳	73	39	43	280
流行性耳下腺炎	139	3.9	3歳～6歳	55	78	9	151
急性出血性結膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
流行性角結膜炎	149	24.8	20歳未満	23	24	18	190
細菌性髄膜炎	4	0.6	0～4歳	100	0	286	67
無菌性髄膜炎	1	0.1	0～4歳	100	100	11	15
マイコプラズマ肺炎	7	1.0	10歳未満	86	54	9	14
クラミジア肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)	3	0.4	10歳未満	67	11	4	82
性器クラミジア感染症	259	19.9	20歳代	52	106	103	69
性器 ヘルペスウイルス感染症	106	8.2	30歳代～40歳代	40	208	205	89
尖圭コンジローマ	22	1.7	20歳代	64	147	102	29
淋菌感染症	74	5.7	20歳代～30歳代	73	112	113	66
メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	190	27.1	70歳以上	65	102	88	87
ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	2	0.3	0～4歳	100	200	31	16
薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.0	—	—	0	0	0



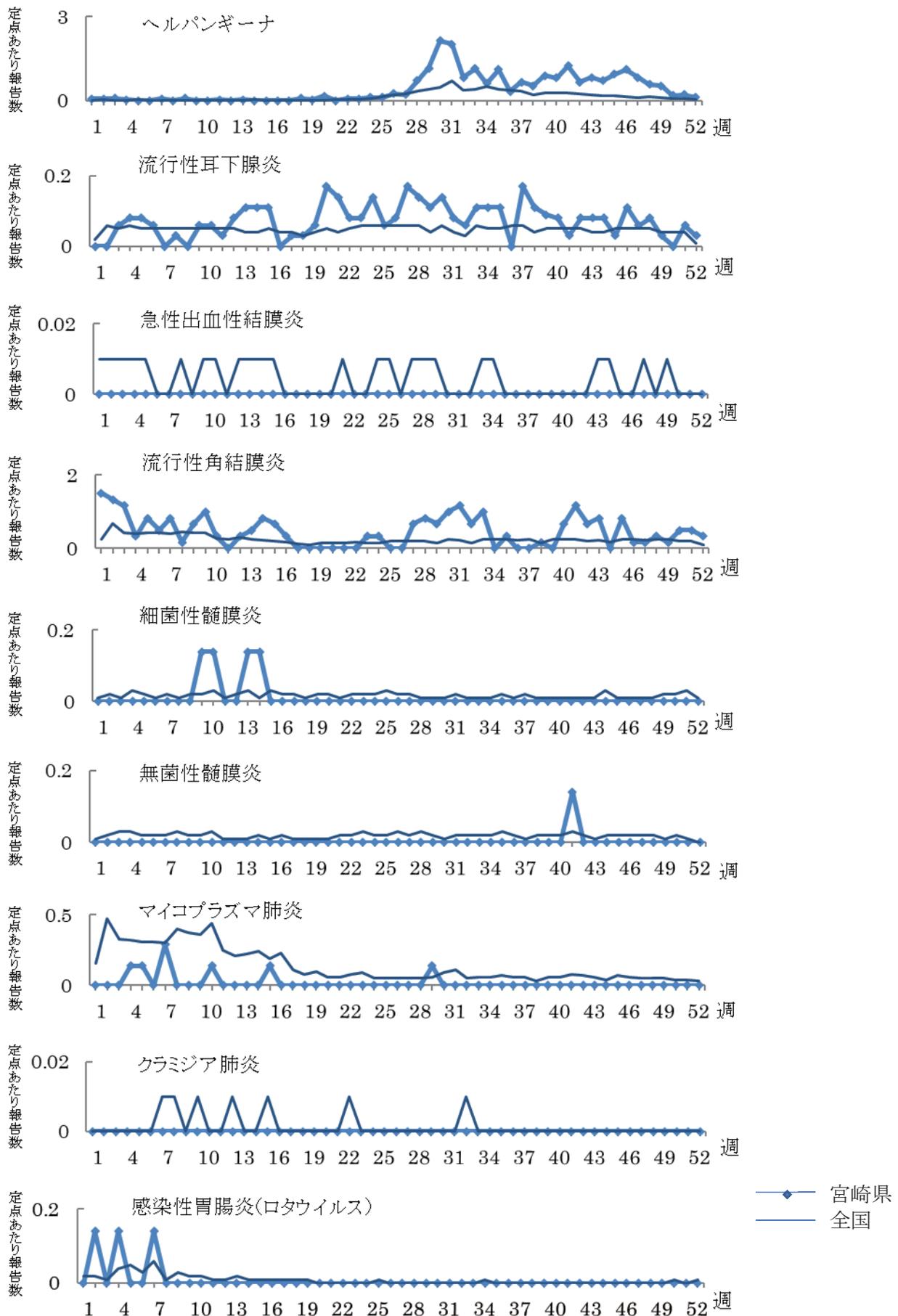


図2 定点把握対象疾患(週報告対象)の定点あたり報告数の週推移(経時発生状況)